

香取遺産

① 与謝野晶子歌碑
② 今泉恒丸句碑

水郷を訪れた文人たち

vol.190

—江戸から明治にかけて—



② ①

利根川下流域に広がる風光明媚な水郷は、江戸時代から多くの文人墨客が訪れました。香取神宮・鹿島神宮・息栖神社を巡る三社詣での旅が多かったようです。享和元（1801）年十返舎一九（諸国道中金草鞋）、亜欧堂田善（総州真景図彙）、高田与清（鹿島日記）、文政8（1825）年渡辺華山（四州真景）などがこの地を訪れています。また、小林一茶は文化6（1809）年に佐原在住の俳人今泉恒丸を訪ねています。

明治になると、通運丸などの外輪蒸気船が就航し、鉄道も明治31年に佐原まで開通、観光が本格化します。徳富蘆花は、明治29年11月1日午後8時、蛸殻町から蒸気船で銚子に向かいました。銚子に数日間滞在した後、水郷を巡ってその自然を描写し「舟は蘆の茂りし中洲に沿ひ、また左の岸に沿いつゝ、深きに揺櫓し、浅きに棹し行く。水村の趣何處も同じことながら、此あたりは景色殊にすぐれ、川水の鏡の如く光りたるに、空行く白雲、汀の枯蘆、蘆間隠れの茅舎、屋後の林、繁ぎし小舟、汲水に菜洗ふ村の女まで残りなく影を映し舟脚の行くまゝに水ゆらゆらと揺ぎて、蘆影柵影人影舟影一時に伸びつ縮みつ。」（水國の秋）と美文を残しています。また、与謝野晶子も明治44年に訪れ「かきつばた 香取の神の津の宮の 宿屋に上る板の仮橋」と詠みました。

その他、大町桂月（北総の十六島）、尾崎紅葉（銚子記行）、竹久夢二（涼しき土地）、志賀直哉（過去）、長田幹彦（水郷の夏）など、多彩な文人たちが水郷を訪れ、紀行文や作品を残しています。

※丸かつこ内の作品全てに水郷が登場しています